

浅田朝次は、カンカン照りのたんぼ道をひとりで歩いていた。

手には、ぬるい缶ビールが数本と柿ピーの入った布袋をぶら下げている。

今日から盆休みで、飯場の同僚たちは昨日から帰省していた。

浅田に帰る場所はない。小学校に上がる前、空襲で家族が全員死に、浅田だけが生き残った。親戚中をたらい回しにされ、中学校を卒業してすぐに土方を始めた。

そして、二十年。全国を転々とし、今は名も知らぬ田舎町にいた。田舎の割には大規模な工事で、新しい県道を通すのだと聞いている。来年の春に終わる予定だった。

何の感慨もない。日銭は酒か女に使い、貯金もない。結婚できとも思えなかった。未来に何の希望もないが、突然未来を絶たれた家族のように、何もなさず野たれ死ねばいいと思っていた。

寝るだけのプレハブが見えてくる。この田舎町は広大な水田が広がり、木陰ひとつもない。プレハブは水田のど真ん中にあつた。遠くに集落が見えるが、農作業をするのでもなければ通る人影はない。雑貨屋まで行くのもひと苦労だった。

「あちいな……」

ため息をついて、プレハブの引き戸に手をかける。扇風機があれば外よりは少しましだろう。

と、プレハブの中で人の気配がする。盗むものなど古布団ぐらいしかないが、身体が緊張する。ゆつくりと、音をたてずに戸を開けた。

「はっ……あつ、あつ、ああっ……佑介え、好きだよ」

女が喘ぐ声が聞こえた。いや、女というには幼すぎる。

見ると、土方たちが寝る古布団を勝手に敷いて、小学生の高学年か、中学生くらいの少年が、小麦色の脚を抱えて腰を振っていた。腰の動きが、いらいだいたいほどぎこちない。

それでも、少年に組み敷かれている少女は、慣れた女のように声をあげている。そして、少女の顔を観察するように、低学年と思われる少年が少女の顔を凝視していた。

全員全裸である。そして誰も浅田に気づいていない。

こんな田舎では女を買えるところもない。水商売の女と遊ぶ店さえない。婆さんがひとりで切り盛りしている居酒屋が二、三件あるだけだ。

浅田の股間がむくむくと力を持ち、凶暴な気持ち湧いてきた。この少女を犯してやろうと思っていた。

「おまえら、勝手に入ってなにしてんだ」

ドスの効いた声だったかもしれない。三人とも、びくりと身体が跳ねて氷漬けのように動かなくなった。どすどすと、日に焼けた畳を踏んで三人に近寄る。

「ひいつ……」

少年が、少女から離れて立ち上がった。毛も生えていないちんこが、ピンと立っている。ぬれぬれとてかっていた。

少女が、広げた股を浅田に見せていた。やはり毛は生えておらず、大人と違ってやる気を失わせる黒ずみもない。肌と同じ色の褌が、うつすらと開いていた。

「おまんこしてんのか」

少女はぱっと脚を閉じる。

古布団に横たわった少女にはスクール水着の跡がくつきりと残っていた。日焼けした手足から真っ白に浮かび上がる胸はふくらみかけで、腰もそれほどくびれていない。幼い身体だった。

少女の大きな瞳は恐怖で潤み、視線を浅田へ固めていた。唇は薄めで、肩まで伸びた黒髪がさらりと布団に広がっている。眉で切りそろえた前髪は、汗で額にくっついていた。

浅田は息を呑んだ。

少女は美しかった。東京のお嬢様でも、ここまで整った顔立ちはそう見る

ものではない。水着で隠れた部分以外の、手足と顔がすっかり日焼けしているのが、純朴な田舎娘といった雰囲気を作っている。

それにしても、この幼さで軽率にセックスをしていながら、将来あばずれになりそうな気配はまるでない。これが田舎のおおらかさなのか。

浅田の喉が鳴る。この少女を犯したいという欲望はますます高まってきたが、それ以上に好奇心が湧いてきた。少女の枕元に膝をつく。

「姉ちゃん、中学生か？　いつからおまんこしてんだ」

さすがに、小学生がセックスはしていないだろうと思っていた。

少女の眼が怯えに震える。口を開きかけるが、何も言葉は出てこなかった。ふと、察する。

「黙ってプレハブに入ったとか、おまんこしてただとか、誰にも言わねえから安心しな」

できるだけ優しく話しかける。それに、言う相手もない。

まさに心配していたことだったのか、少女の眼に安堵が現れる。そして、ゆつくりと身体を起こした。

「私、中学生じゃないよ。六年生」

さすがに驚く。浅田が小学生だったころは、セックスをしている同級生のことなど、知りもしなかった。進駐軍に乱暴されたとか噂になっていたのは何人かいたが、その意味が判ったのはずっと後のことで、公然と語られることもなかった。

少女の声は甘える子猫のように、高くて耳に残るものだった。自分の逸物で鳴かせてみたい思いが強くなっていく。興奮で乱れてきた鼓動を鎮めるように、静かに口を開いた。

「それで、毛も生えてねえんだな」

少女が、さっと両手で胸と股間を隠す。今度は、眼に警戒が浮かんた。

「服、着ていいだら？」

このあたりの方言で、少女が懇願する。東京で育った浅田にとっては、女が喋るにはひどく乱暴に聞こえるが、この可憐な少女から発せられるとその

落差もまた惹きつけられるものがあった。

浅田は、もっと楽しみたくなった。

「ダメだ。まだ質問に答えてねえ。いつからおまんこしてんだ？」

にやりと笑うと、少女は諦めたようにうつむく。

「……夏休みになってから。弟の智や、友達の佑介と」

少女とセックスしていたのが佑介で、じっと見ていたのが弟だろう。それにしても、弟とは。外見とのギャップに、ますます嬉しくなってくる。

「ほう、弟としてんのか。そりゃいいや」

呆然と全裸で立っている少年ふたりに眼を向ける。佑介がびっくりと肩を震わせ、唇をぎゅつと引き締めると浅田の側に立った。

「黙って入って、ごめんなさい。すぐに帰ります」

佑介が深々と頭を下げた。膝が震えている。勇気を振り絞って、少女を守ろうとしているのか。

だが、必ず少女を犯すと決めていた。どうせなら、こいつらも巻きこむことにする。

「いいって、いいって。みんな盆休みで帰っちゃったが、俺は帰るところなんかねえからよう、ひとりでここに泊まってんだ。気にするこたあねえよ」

浅田は手を振り、ずいと佑介に顔を寄せる。

「おまえ、おまんこのやり方知ってんのか？」

「え……ちんぽをまんこに入れやあいいだら？」

唐突な問いに、佑介は方言に戻った。あの下手な腰の使い方では、その程度の認識でもしうがない。

「違うんだって。おまんこにやあ、それは色々なやり方があってな、姉ちゃんが白眼ひん剥いたり、おまえの腰が抜けるくらい気持ちよくなれるんだ。よおし、俺が全部教えてやる」

いよいよ、始まりだ。ほぼ商売女だが、抱いた女は絶対に千人を超えている。小学生に仕込むことなど雑作もない。

汗の染みた作業服を手早く脱ぎ、全裸になる。すでに逸物は、はち切れん

ばかりに天をついていた。

子供たちは、浅田の屹立したモノを、眼を見開いて見つめていた。

「サツマイモみたい」

弟の智がつぶやく。言い得て妙だった。太くごつごつとしていて、黒紫色の浅田の逸物はまさに芋である。これがこれから少女の幼い膺を蹂躪することを想像すると、それだけで射精してしまいそうだった。

プレハブの中にいる四人が、全員素っ裸である。滑稽さに笑いがこぼれた。

「姉ちゃん、しゃぶったことあるか」

「え……何を？」

「チンポだよ、チンポ」

自分で逸物をぴしゃりと叩くと、バネ仕掛けのように跳ね上がり、頼もしくへそを打った。

「うん……ちよっと」

「あるのかよ。やるじゃねえか。これにもやり方があってな、とりあえずここに膝立ちになんな」

逸物の下を指さす。少女は釈然としない様子だったが、結局言うとおりの布団の上に膝立ちになった。いきり立った逸物を、少女の鼻先に突きつける。

「うっ……」

少女が顔をそむけた。小便をするたびにモノを洗う男はいないし、さつきまで炎天下を歩いてきて汗まみれだ。相当臭うに違いない。

「舐みたいに、舐めてみな」

声を低くする。有無を言わせるつもりはなかった。

少女はしばらく横目でちらちらと逸物をうかがっていたが、覚悟を決めたのか、その小さい手に逸物をつかんだ。浅田のモノは、少女の手では指が回らないほど太く、半分も隠せないほど長かった。

声が出そうになった。汗に湿った手に、こわごわと握られている。一瞬、このまま手で果てたいと気持ちに噴き上がるが、必死でこらえた。

逸物を握ったまま、少女は横を向いていたが、浅く開いた唇からは吐息が

規則的にこぼれ、薄い胸は上下していた。興奮しているのは明らかだった。

「どうした、早く舐めろよ」

自分の声が、わずかに震えていた。

急かされた少女が、ぎゅっと眼をつぶる。小さな舌をおそろおそろ出して、つかんだ手を頼りに顔を逸物へ近づけていく。

舌先が、ちろっと亀頭にふれた。歓喜が脳を貫いた。ついさつき出会ったばかりの美少女に、もう逸物を舐めさせている。

「いいぞ、もつとだ」

少女は、半ばやけ気味に舌全体でぺろっと裏筋から亀頭を舐め上げた。

「うおっ」

あまりの刺激に、声が出てしまった。少女が、長いまつげのくりくりした眼で、浅田を見上げる。

「それでいいんだ。その調子でやってみろ」

再び逸物に向き直り、少女は小さな口を精一杯に開いた。すつぽりと、生温かい感触が逸物を包みこむ。気を抜くと暴発しそうだった。尻に力を入れて耐える。

「うめえな。ちゃんと齒を立てないのは偉いぞ」

佑介を相手に、そういうことも学んだのだろう。小学生を相手に、嫉妬心が湧く。佑介を睨むと、呆けた顔で逸物を口に含む少女を凝視していた。少しだけ満足する。

「次はそのまま、ベロで舐め回してみるんだ」

「ん……」

うなずく代わりに、少女が吐息をもらすと、亀頭が熱く濡れたゴムではたかれるかのようになぶられる。

「あ……いいぞっ」

逸物と少女の口の間から、唾液が落ちる。もう我慢できず、口の中へ出してしまおうと思ったとき、少女が離れた。痛そうに、細いあごを揉んでいる。

「太すぎて、舐めれん」

口を開けすぎて疲れたのだろう。男冥利に尽きる言葉だった。

とはいえ、あの調子で舐められていたらすぐにいってしまふ。別の提案をした。

「それじゃ、サオの横を舐めろ。アイスクャンデイーを横から咥えるようにな」

「うん……」

少女は素直に、逸物の胴に唇をふれる。さすがに、これだけで射精することとはなさそうだった。はむはむと口を動かし、根本から亀頭まで舌を滑らせる。本当に、アイスクャンデイーを食べるようにやっていた。

「ん……ちゅっ」

少女はさほど嫌がる様子もなく、逸物を左右からまんべんなく舐めていった。少女の唾液で、てらてらと逸物が光る。快感はあるのだが、むしろすぐたく、もどかしさが凶暴な感情をかきたてていく。

「こら、ボウズども。ぼーっと突っ立ってんじゃねえよ」

「え、え……」

佑介も智も、怯えた顔になる。佑介のピンと立っていた幼いモノは、完全にしぼんでいた。

「おい佑介、おまえは下から姉ちゃんのまんこを舐めてやれ」

佑介が自分を指さす。少しの間迷っていたが、立ち膝の少女の背後から、仰向けになって頭を股の間に突っこんだ。

「わ、すげえ……濡れて光つとる」

少女のまんこを見上げた佑介は、興奮した声をあげる。ちんこがピンと立ち直った。

逸物を横から含みながら、少女が腰をよじる。恥ずかしいのだろう。

「姉ちゃん、佑介の顔に腰を降ろしな」

「え……け、けどが……」

逸物から口を離し、少女は耳まで赤くしてためらう。

「やれよ」

「……うん」

厳しめの声に、少女はおそるおそる腰を下げていく。

「おっ、おっ」

近づいてくるまんこに、佑介の眼が見開いた。待ちきれなかったのか、佑介は少女の両腿を抱えてまんこを顔に引きつけた。

「ひあああっ……べろが、入って……にゆるにゆる動いとる……ああっ」

少女が、こみあげてくるものに耐えるように眼を強く閉じる。落ちる身体を支えるためか、逸物をつかむ手に力がこもった。

浅田は、少女の前にあぐらをかいた。少女が正座の姿勢では、逸物を舐めるには立ったままでは高すぎる。あぐらの中から、凶悪な太い肉塊がそそり立っていた。

「これなら、姉ちゃんもしゃぶりやすいだろ」

「う、う、うん……んんっ！」

佑介から与えられる刺激に耐えながら、少女が身体を倒して亀頭を咥える。弟の智が、丸見えになった少女の尻を、瞳を輝かせて見つめていた。

「おい智、姉ちゃんのどこが好きなんだ？」

「尻の穴！　でれえ、どじょうの口みたい」

智が元氣よく即答する。どじょうの口とはなかなか上手い表現だった。

「はははっ、そりやいいや。思い切り気持ちよくしてやれ」

「うん！」

智は、まんこを舐めている佑介の腹に、容赦なくまたがった。

「ぐふっ」

カエルをつぶしたような声が漏れたが、佑介は構わず一心不乱に少女のまんこを舐めている。

「んっ、んっ、あむっ」

少女は小さな口で、太い亀頭を精一杯に咥えている。

「かんちよう！」

智がためらいなく、少女の尻に人差し指を根本まで挿しこむ。

「うううんっ！」

亀頭に、鈍い痛みが跳ねた。

「痛っ、こら噛むな。もう少し我慢しろ」

「ううっ…んんっ！　ふうっ…ううっ」

智は嬉しそうに肛門に指を出し入れする。佑介は必死でまんこを舐める。少女は唾液をこぼしながら亀頭をひたむきに咥えている。

ふたりに責められ、浅田に奉仕している少女が、何か神聖な存在に見えた。

少女がどこまで行くのか、見てみたくなった。

「姉ちゃん、もつと頑張って奥まで飲みこんでみな」

少女はうなずく余裕もないが、手を逸物の根本に添えて、限界まで開いた口をじりじりと押し込んでいく。1センチ。2センチ。少女の小さな頭蓋骨の、喉の奥まで逸物が届いたかと思ったときだった。

「げほっ…！！」

少女が激しくえずき、逸物から口を離す。佑介と智の刺激から逃れるように横へ倒れ、何度も咳きこんでいた。

この何か超越した感のある少女も、身体づくりは普通の子供と同じだった。少しだけ、罪悪感が心に染みる。犯したいという気持ちはいささかも揺るがないが、少女にもつと快感を与えたいという思いが生まれていた。

「悪い悪い、ちよつと無理させちまったな。今度はおじさんが姉ちゃんを気持ちよくしてやる。おまえら、しっかり見てろよ。どうしたら女が感じるのか、よおく教えてやるからな」

ぐったりと横たわった少女を、持ち上げる。身長は140センチ程度だろうが、それなりに重い。肌はしっとり汗で湿っていて、手のひらに吸いくような肌理の細かさがあった。

少女の肌への感動は押し隠しつつ、幼子と飯を食べる祖父のようにあぐらの上へ少女を座らせる。逸物が、少女の背中にぴたりと当たっていた。この肌の感触を全身で味わいたいが、もう少し後にとっておく。

「姉ちゃん、脚を開きな」

「う……ん」

ぼんやりと、少女が言われるがままに脚を開く。佑介も智も、血走った眼で少女の中心へ視線を凝縮させていた。

「いいか、これがおまんこだ。このビラビラで普段は穴を覆ってる。コレを開いてやって……見ろ、このちっこい穴にちんぽを入れるんだ」

「あっ……」

親指と中指で、少女の小さな襷を開くと、かすかな声が漏れる。

「このビラビラが感じる女もいるし、穴の周りが感じる女もいる。ひとそれぞれだ。姉ちゃんはどうか」

人差し指の先で、軽く襷を撫でる。

「う……うん……」

次に、襷をつまみながらしごいていく。

「ふう、ふうっ……あ……」

可愛い声を出しているが、まだ余裕がありそうだった。

「よし、これならどうだ」

人差し指と薬指で膣を開き、中指の第一関節まで沈める。熱い泥のような感触に、鼓動が速くなってきた。

「あっ……！」

少女がびくりと震える。

きつい穴を広げるように、指先でゆっくりと小さな円を描いていく。

「そ、それっ……う……はあっ、はあっ……ああっ！」

少女の身体が小刻みに跳ね、肩まで伸びた髪が鼻先にふれる。石けんと、ほのかな汗の匂いがした。背中が薄桃色に染まり、どんどん熱を持つてくる。

指先が、くちゆくちゅと音をたてるようになった。蜜が溢れているのだ。

感じさせている悦びが、じわりとせり上がってくる。

「姉ちゃんは、ここが好きなんだな」

「うん……うんっ」

こくこくと、何度もうなずく。自分の胸が、大きく上下していることに気

づく。浅田もまた全身に熱を帯びてきていた。

ずぶりと、中指をさらに深く入れる。

「あ……っ！　ふうっ……！」

甘く、濡れた声が漏れる。大人では、もうこんな声は出せないだろう。

まんこはますます蜜に溢れ、指が滑らかに出し入れできるようになってくる。それでいて、幼い穴はとても狭く、きゅうきゅうと指を締め上げる。逸物を入れたら、ひとこすりで果ててしまう予感がした。

「んっ、うんっ、あんっ……」

出し入れしながら、ときどき入口をくるくる回してやる。佑介と智が、かぶりつくような間近でまじまじと眺めていた。と、大事なことを忘れていたことに気づく。

少女の膣から指を抜く。にちゃりと水音がした。

「え……？」

少女が、とろんとした瞳で振り返る。

「そうそう、まだおまんこにやあ秘密があるんだ。おまえら、よく見てみる。おまんこの上にちよつとぼちつとしたもんがあるだろ。クリトリスってんだ」

「へえ、そう言うだかん」

佑介はそれこそ鼻が付きそうな距離だった。

少女の背が硬くこわばる。ここをさわると、どうなるかは知っているようだった。

「普段は何枚か皮に包まれてるけどな、こうやって剥いてやるんだ」

まんこを開いたまま、自由な親指を包まれたクリトリスに当て、ずるっとなぞらして皮を剥く。

「ひいっ……！」

少女が甲高い声をあげた。よほど刺激が強かったらしい。

「一番感じる場所だけだな、力任せじゃ痛いだけだ。感じさせるにはほどほどでなくちやいけねえ」

膣から溢れる蜜を親指でぬぐい、クリトリスへ軽く揉みこむように滑らせ

る。

「ちよう…それっ…あかんっ！ 強い…いいっ！」

少女の身体が反り返り、髪先が顔をなぶる。あまりの感じぶりに、嬉しすぎて射精しそうになる。しかし、出すなら少女の中しかない。今は耐える。

「いいか、ここでほかの指を遊ばせてちゃもったいいねえ。このまま、おまんこを可愛がつてやるんだ」

人差し指と薬指で膣を開き、親指でクリトリスを揉み、そして中指をずぶりと奥深く挿しこむ。

「あうううっ！」

少女の身体が大きく跳ねる。もはや、手のひら全体が粘液で濡れていた。しかし、まだ終わりではない。

「でな、おまんこの天井をこすってやるんだ。どっかに感じる場所がある」
中指の先をくいと曲げて、秘められたポイントを探す。

「…っ！」

声も出せず、息が詰まる音が少女からこぼれる。

もう充分だろう。感じるにしても、指でイカせたくはない。逸物でイカせたい。指を、ゆっくりと膣から抜いた。

「さあ、お待ちかねだぜ」

自分の声が、期待で震えているのが判る。少女をあぐらから下ろすと、ぐったりとうつ伏せになってしまう。膣から溢れた液で、内腿まで濡れ光っていた。

「はあ…ふう…」

少女は、もう動く力さえ無くしてしまったようだった。

「姉ちゃん、これからもっと気持ちよくなるんだぜ。尻をあげな」

「うん…」

少女はもじもじと、素直に尻を突き上げた姿勢になる。膣は薄く開き、充分に潤っていた。浅田の逸物を待ちかねているかのように、ひくひくとうごめいている。

金も払わず、今日出会ったばかりの浅田に、今まさに身体を許そうとしている少女に感謝以上の崇拝に近い念を抱いていた。家族を失ってから三十年、ここまで無条件に浅田を受け入れた者はいなかった。

「いくぜ……」

喉がからからに乾いていた。震える手で、くびれのほとんどない腰をつかむ。上からみた尻は引き締まっっていて、幼いながらに脳を揺さぶられるような丸みを帯びていた。

いよいよ、剛張した逸物を、少女の入口に押し当てる。ちゃぷつと、ねばる音がした。

少女の穴の大きさでは、とても受け入れられるようには見えない。だからこそ、入れたときの快感は想像もできなかった。

確実に入るよう、手で逸物の位置を修正する。きちんと引かかった。

少女の背中が、きゅつと縮まった。

「や、やめ……」

少女が言い終わる前に、腰をつかんで逸物を挿入する。

締まるなどというものではない。肉の壁だ。亀頭が半分ほど入っただけで、もう浅田を拒むように押しだそうとしている。

「ちっ」

意地になって、力づくでさらに押しこむ。亀頭を全部飲みこんだとき、みちつと音がした。

「痛い！ 痛い痛い痛い！ やめて、やめてえ！」

ずっと続いた愛撫で軟体動物のようになっていた少女が、鋭い正気の手をあげた。

犯したい欲望より、拒絶される恐怖が勝り、浅田は慌てて引き抜いた。

「まだ先っぽしか入ってねえぜ。まあ六年生じゃしょうがねえか」

大人ぶってみせるが、胸は喪失の予感に冷え始めている。

「ねえ、何かびりっていった」

少女は眼いっぱい涙を溜めて、見上げてくる。

「どうもなつてねえよ。さっきの調子じゃあ、何回もおまんこしてんだろ」

「ほだけどが…おじさん、大きすぎるもん。そんな大きいちんぽで、したことない」

少女の言葉に、冷えかかった胸が誇らしさで満ちる。少女は佑介と智としかしたことがないのだろうが、小学生と比べて大きいと言われても喜んでしまうのは仕方がない。

「あのな、おまんこの付き方で入りやすい姿勢があるんだ。姉ちゃん、仰向けに寝てみな。たぶん入ると思うぜ」

「痛い、やだ」

少女は布団に女座りに膝を崩し、胸を守るように腕を交差していた。眉をひそめ、今にも泣きそうだ。

「後ろがきついときにゃ、前から入れればたいてい楽なもんだ。まあ、痛かったらやめてやるから安心しな」

本当はやめたくなかった。少女の膣が浅田を受け入れられることを、本気で祈った。

「絶対、痛かったらやめてね」

「おうよ」

大きくうなづく。少女は、布団の上にゆっくりと仰向けになった。

痺れるような衝撃が、身体を叩く。あらためて見る、少女の身体はあまりに美しかった。

手脚と顔はしっかりと日焼けしているが、スクール水着に隠れていた胸からへそ、そしてまんこは神秘的なまでに白かった。

成長が始まったばかりの乳房のふくらみはささやかで、先端にぽつりとついた米粒のような乳首は肌の色そのままだった。まだ、丸く盛り上がるほど完成された乳首ではない。

乳房の下にはわずかにあばらが浮いているが、痩せすぎというほどでもない。腰にくびれはあまりないが、尻から太腿にかけては脂肪が少なくすらりとしている。

そして、割れ目の周囲にはうぶ毛も生えていず、褓も大人のように色づきもしていなかった。もし、膣に清純という言葉を捧げるなら、それはまさにこの少女に送られるべきものだった。

「おじさん、どい^{どうしたの}だん」

動きを止めてしまった浅田を、少女が大きな瞳で不思議そうに見上げる。

「いや、何でもねえ」

小学生相手に、いや大人相手でも、美しさにみとれていたなどとは言えるものではない。

ごまかすように、浅田は少女の両膝を下からすくい上げ、カエルが裏返ったような姿勢にさせた。濡れた幼い膣が、陽光にさらけ出される。

少女の顔が、不安に曇る。

浅田は見ないふりをして、いきり立った逸物を少女の入口へと当てる。手を添えて軽く揺ると、くちゆくちゅと音をたてて褓が広がり、少女の穴と対面した。

ここで腰を押しこめば、入る。

鼓動が再び、壊れそうなほど速くなる。乾いた喉を唾で湿らせ、浅田はいつものやり方で逸物を沈めていった。

「うううっ……！」

少女が眉を下げ、苦悶の表情を浮かべる。が、さっきのように痛がったりはしない。亀頭が半分ほど膣をくぐっている。きついことはきついが、拒絶するような肉の壁はない。充分潤っていることもあって、まだまだ飲みこめそうだった。

浅田はさらに深く、少女の中へ沈めていく。

「ふうっ、ふうっ……！ はああっ」

よほど息苦しいのか、少女の息が荒くなる。両手で、浅田の毛むくじやらの腿を押し返そうとしているが、本気の力は感じない。痛いとも言わない。すでに、少女の膣は亀頭を飲みこんでいた。その熱い葛湯^{くずゆ}のようなぬめりと、硬ささえ感じる締めつけに、浅田の昂奮はこの上もなく高まっていく。

さらに奥へ進んだ。

「ああああっ」

それ以上、先に進めなくなる。浅田の逸物は、まだ三分の一ほど外に出ていた。少女の幼い膺は、まだ浅田をすべて飲みこめるほど深くはなかった。

「まだ全部入らねえか。けど、すげえ締めつけだし、よおく濡れてるぜ。姉ちゃん、将来有望だな」

「ふう……ふう……ふう」

少女は答えることもできず、苦しそうに呼吸を繰り返す。

「まんこてやあ、こんなに広がるだかん」

佑介が、少し怯えのこもった声でつぶやいた。

「そりやあ赤ん坊が出てくる穴だからな。どうだい姉ちゃん、痛えか？」

「え^苦らい……けどが、痛くは……」

そうは言っているものの、顔にはうつすらと恐怖が浮かんでいる。

「や、優しく……してね」

少女の精一杯のお願いに、暴発しそうになる。

「判ってるって」

ゆっくりと腰を引く。逸物をみっちり包む肉が、逃がすまいと絡みついてくる。かなりの抵抗だった。

「あうううっ！」

カリで天井をぎりぐりと擦られて、少女が大きな声を出す。

亀頭を残し、入口で止まる。すごい膺だった。何も考えずにむさぼりたかったが、そんなことをしたら次のひと突きで出してしまうだろう。

身体は最高潮に昂ぶっているが、この奇跡のような少女の身体を、できるだけ長く味わいたい。

慎重に奥まで入れる。強く締められながらも、たっぷりの愛液で滑らかに沈んでいった。

「うふうっ……！」

逸物を突き上げるたび、少女の肺を圧しているかのように呼気もれる。

うかつに射精してしまわないように、ゆっくりと前後に動く。

「ふうっ……ああっ……うんっ……ああんっ」

何度も動くうちに、少女の顔から恐怖が薄れていく。声には苦しさよりも、濡れた甘さが混ざり始めていた。

シンプルな前後動を、慎重に繰り返す。

「あっ、あっ、あんっ、んんっ、ああっ」

少女の両手が、ゆらゆらと虚空を漂う。両手は浅田の首を、すがるように抱えた。

歓喜が、頭の中で爆発する。浅田は、身体をぐつと倒した。逸物が、行き止まりのさらに奥へずぶずぶと入っていく。

「きゃあああっ！」

少女が悲鳴をあげる。首にまわした手に、必死の力がこもっていた。

顔が近い。薄く開いた小さな唇から、甘い息がもれている。衝動的に唇を奪った。

「ん……っ！」

そのまま、舌をねじこむ。唾液の甘さを感じる。湧き出る唾液を舐め尽くすように、少女の口中を蹂躪した。

「んんっ、ううんっ、んううっ、んぐっ！」

少女が流れこんだ唾液を、喉を鳴らして飲み下す。

浅田は、キスをしながら腰だけを前後させる。舌と、逸物で少女を味わっている。余裕は、ドライアイスのように消えていく。

「うふう……んっ……んんんっ……」

口を塞がれた少女が、喉の奥で甘い声をくぐもらせる。

もう無理だった。

少女から口を離す。そして、ぎりぎりまで抜いた逸物を、全力で押しこんだ。

「ふっ！」

ずるりと寒天をこじ開けていくような強烈な感触が、浅田の逸物を絞り上

げる。

「ぐぐうああっ！」

少女が眼を見開き、すさまじい声をあげる。外に聞こえたかもしれない。もう、どうでもいい。

この美しい少女を、狂わせたい。過去の記憶から、有効だった方法を思い出す。

深く突いたあと、入口付近をつつくように浅く出し入れする。

「あっ……？」

少女が、覚悟を空振りしたような顔になる。そのまま、浅い出し入れを続けた。

「あうん……嫌あっ」

首を激しく振って、いやいやをする。

「おねだりかよ」

六年生だというのに、少女はもう求めるようになってしまった。浅田の胸に、充実したものが満ちる。

「そらよっ」

浅田は突然、奥まで突きこむ。少女の腹が、ぎゅっとへこんだ。

「あああっ！　ぎいっ……ふうっ」

獣のように少女が呻いた。美しい顔から、こんな声が出てくることにますます昂奮する。再び、細かな動きに戻る。俗に言う、九浅一深という動きだが、感じる女が多かった。

「ああっ、あんっ、あっ、あああっ」

浅い動きのときは、少女は可愛らしく喘ぐ。深く入れる。

「ぐふうっ……がっ……はあっ」

芋のような逸物に内臓を突き上げられて、肺から空気を絞り出す。

もう、浅田の逸物に限界が訪れようとしていた。大歓喜の予感で、止めようもない獰猛さが湧き上がる。

「姉ちゃんっ……そろそろ、いいかい」

「うん……うんっ」

少女は必死でうなずくが、何に同意しているのか判っているとは思えない。

「生理、来てんのかい」

「ううんっ……！」

首を横に振る。たとえ来ていたとしても、中に出そうという気持ちが揺らぐとはこれっぽっちも思えなかった。

「よし」

少女の、くびれはないが細い腰を、両手でぐっとつかむ。

全力で、腰に引きつけた。

ぬめりながらも強い締めつけが、逸物の根本まで咥えこむ。もう、止まることはできない。

「がはあっ……！」

少女が、盛大に息を吐き出す。

力の限り、少女の膣から快楽を貪っていく。今まで買った何人もの女よりも、少女から襲いかかってくる快感は遙かに上だった。

「ぐっ……」

何度も何度も、無我夢中で、少しでも早く少女の中へ出すために、少女の股の底へ腰を叩きつける。

「あっ、あああっ、ああっ……！　があっ……ぐうっ……んんんうっ！」

少女は浅田の力で人形のように翻弄され、獣のような呻きを繰り返す。

高まりが、逸物の隅々まで充填されていく。そのまま、爆ぜてしまいそうだった。もう限界だ。

「姉ちゃんっ、いくぞっ。いいか、中に出すぞっ」

「ううっ……うんっ……うんっ！　い、いいよおっ！」

少女は強く眼をつぶり、何度もうなずく。

最後の一撃を、少女の一番奥に叩きつけた。

同時に、すべてがほとばしる。

「うおおああっ」

魂が、少女の子宮に吸いこまれていくような解放だった。

しばらく女を抱いていなかったとはいえ、逸物はびくんびくんと跳ね続け、いつまでも精液を絞り出し続ける。

「くうっ……」

腹に力を入れて、最後の一滴を絞りきる。

「ああああ……！」

少女から、力の抜けた震える声がこぼれる。

膣の中で逸物が力を失っていくのを感じながら、少女を抱きしめた。少女もまた、浅田の背中を抱き返す。

汗まみれの腹と胸が、浅田の身体と重なる。お互いに濡れた身体は、そのままひとつに融けてしまいそうだった。それは、泣けてしまいそうなほどの安らぎだった。

「ふう……ふう……ふう……」

少女の呼吸が、浅田の下で落ち着いてくる。名残惜しく、身体を持ち上げた。

「姉ちゃん、最初はちよいと浅いと思ったが、締まりもぬめりも最高だったぜ」

「そうやあ……？」

少女はとろんとした眼で、浅田を見上げている。これほど充実したセックスは初めてだったかもしれない。

「さて、と」

狂熱も冷め、浅田は硬さを失った逸物をずりと引き抜く。ぐちゅつと音がして、黄味がかった精液が大量にこぼれてくる。自分でも驚くほどの量だった。

「まんこがでれえ広がっとなる……この甘酒みたいな、何やあ？」

佑介が、すっかり毒気が抜かれた顔で、少女のまんこをのぞきこむ。まんこは、ぽっかりと穴を開けていて、浅田の逸物が侵入した痕を生々しく残していた。

「これがおれの子種だ。これをおまんこの中に出すと、子供ができるんだぜ」
これほど判りやすく印象的な性教育はないだろう。

「私、おじさんの赤ちゃん産むやあ……」

少女の言葉にどきりとする。無理に、笑ってみせる。

「生理が来てなきゃ、産めねえよ。安心しな」

そう、自分に言い聞かせた。

窓の外を見ると、夏の日は盛りを過ぎ、夕方が迫っている気配を感じた。

「おっと、だいぶ時間が経っちまったな」

裸のまま、プレハブの隅に転がっている箱ティッシュを持ってくる。何枚か抜いて、少女の膣から垂れている精液を軽くぬぐった。

「ふぐっ……」

少女がぴくりと身体を動かす。

「そろそろ帰らんと、怒られる」

智が、心細い声でつぶやいた。

「そうだな、今日は帰んな。お盆の間はおれひとりだからよ、また来たらいいや」

胸が、少年のときのようによく打っている。もう一度、いや何度でも少女を抱きたかった。心残りを、濡れた逸物と一緒にティッシュでぬぐい去る。

作業服を着直した。しかし、少女は布団から起き上がってこない。

「立てん……」

「しょうがねえな」

少女のくしゅくしゅになった木綿のパンティを拾い、赤ん坊のように履かせてやる。少女はよろよろと立ち上がり、白いTシャツと桃色の短パンを履いた。

「おじやましました」

服を着た佑介と智も、三人が並んでぺこりと頭を下げる。思わず笑ってしまった。三人が、背中を向けたときだった。

「姉ちゃん、名前は何てんだい」

少女が、首だけを後ろへ向けた。

「……桜井ねね」

「おれは、浅田朝次ってんだ」

ねねと名乗った少女は、こくんとうなずくと、歩きにくそうながに股でプレハブを出ていった。浅田はひとりになる。

今まで名前も知らなかった小学生の少女と、あれほど激しいセックスをしたことを思い出す。逸物が、再び硬く張りつめる。今から追いかけて、道端で犯したい衝動に駆られる。

「ははっ」

首を振り、忘れ去られていた布袋から、ぬるい缶ビールを取り出す。

浅田は、ねねと出会ったことに、ひとりで祝杯をあげた。